

未来視点取得による将来世代への貢献度の効果

1170442 武上 由法

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

「社会の持続可能性」は人類にとって、今後の繁栄に関わる大きな課題になっている。しかし、持続可能性を高めるには一人一人が将来をいかにして考える必要があるのか、また人に何か指示行動（これを **Treatment** と呼ぶことにする）をすることによって人は将来に対しての行動を変化させるのか、これらに関して筆者は関心を持ったため、研究の題材を選定した。そこで、筆者は現代の立場から歴史の良し悪しを認識し、その後未来の立場から現代を考える集団（これを **Treatment Group** と呼ぶ）と単に未来から現代の物事の良し悪しを考える集団（これを **Control Group** と呼ぶ）では将来に対して貢献度に違いが現れるのかを新聞記事を用いた経済学実験を行なった。そしてアンケートの結果より、**Treatment Group** の被験者の方が、**Control Group** の被験者よりも将来に対する貢献度は高くなるという結果が明らかとなった。

2. 背景

私たちの生活は、科学技術の進歩によって物質的にも、精神的にも豊かになった。その反面でそれによって有限である資源や環境に悪影響を与え、その結果人類にも多大な悪影響を与えている。これは、人類が自分たちの生きている世界だけの利益だけを追い求めた結果であり、将来世代のことまで考慮に入れてない惨劇からである。このままでは将来の世代に負の遺産を残すことになる。よって、現代に生きる私たちにとっての義務は「社会の持続可能性」をいかにして達成し、将来の世代にも地球から受ける恩恵を享受できる環境を引き継ぐことができるかである。それゆえ、私たちは、地球から受ける恩恵を将来世代にわたって享受できる環境を整備する必要がある。マクロレベルでは政府や国際機関などの大きな組織が法整備するなどの方法が考えられ、ミクロレベルでは私たちは一人一人が自ら考えて行動することが必要であると考えられる。よって、本論文では、どのような意識づけによって、ヒトはより将来志向になるのかを明らかにしていく。またこの研究結果より、人類は少しでも持続可能性に近

づくことができるのではないかと考えている。

3. 目的

本研究では、新聞を用いて、過去の新聞記事を現世代の人々の観点から読ませた場合とそうでない場合とではどちらがより未来志向になるのかを経済学実験によって検証していく。

4. 研究方法

本研究では、被験者の方々に役割の違う二つの異なる作業を行なっていただき、その後アンケートを実施し、それらを用いて比較研究を行う。

まず一つ目のグループは、**Treatment Group** とする。初めに被験者の方々には 4 人 1 グループになってもらう。(端数の関係上 3 人 1 グループになったグループもある)

Treatment Group では、まず 30 年前の新聞（1986 年 10 月 10 日）から記事 10 個抽出し、それらの中から

- ・ 「当時（1986 年）の人たちに、もっと真剣に検討してほしかった」と思う事柄を扱った記事

もしくは

- ・ 「当時（1986 年）の人たちが、よくぞ検討してくれた」と思う事柄を扱った記事

を合わせて最大 3 つ選び、理由とともに回答用紙に優先度の高い順に記入してもらった。この 10 個の新聞記事は社説からスポーツに至るまで様々なトピックを選定した。この時は、現在生きている視点（2016 年 10 月 10 日）から 30 年前の新聞記事を読み、上記二つの評価をしてもらった。次に、30 年前の新聞記事（1986 年 10 月 10 日）から記事 10 個抽出し、それらの中から

- ・ 「当時（1986 年）の人たちに、もっと真剣に検討してほしかった」と思う事柄を扱った記事

もしくは

- ・ 「当時（1986 年）の人たちが、よくぞ検討してくれた」と思う事柄を扱った記事

をグループとして、合わせて最大 3 つ選び、理由とともに優

先度の高い順に記入してもらった。そして、次の作業として被験者の方々には 2046 年の世界にタイムスリップしたと想像してもらい、これからちょうど 30 年後前、すなわち 2016 年 10 月 10 日の新聞を読んでもらった。2046 年に生きる被験者に、それらの新聞記事から

- ・ 「当時（2016 年）の人たちに、もっと真剣に検討してほしかった」と思う事柄を扱った記事

もしくは

- ・ 「当時（2016 年）の人たちが、よくぞ検討してくれた」と思う事柄を扱った記事

を、合わせて最大 3 個選び、理由とともに優先度の高い順に記入してもらった。その後、引き続き、2046 年の世界にタイムスリップしたと想像してもらい、それらの中から

- ・ 「当時（2016 年）の人たちに、もっと真剣に検討してほしかった」と思う事柄を扱った記事

もしくは

- ・ 「当時（2016 年）の人たちが、よくぞ検討してくれた」と思う事柄を扱った記事

をグループとして、合わせて最大 3 つ選び、理由とともに優先度の高い順に記入してもらった。この作業が全て終わった後、4 部構成からなるアンケートに答えてもらった。セクション 0 では被験者に 1000 円を預け、その 1000 円を“30 年後の社会・人々の為の各基金”に幾ら寄付するのか、もしくは寄付しないのか決めてもらった。1000 円のうち寄付しなかった金額は、そのまま被験者の謝礼金となる。また、寄付する場合は、寄付の配分を以下の 6 分野に 100 円単位で、また 1000 円を超えない範囲で分けてもらった。

(1)環境・自然保全（募金先：緑の募金）

(2)社会福祉・介護（募金先：赤い羽根共同募金）

(3)防災（募金先：民間防災ボランティア基金）

(4)文化・伝統・遺産（募金先：日本文化未来遺産運動）

(5)貧困・難民（募金先：国際連合 World Food Program）

(6)教育・人材育成（募金先：あしなが募金）

その後、セクション 1 のアンケートに回答してもらった。セ

クション 1 では、Generativity を測るアンケートである。そして、セクション 2 では Critical Thinking についてのアンケートに答えてもらった。セクション 3 では、行なった実験に関しての感想を自由に書いてもらった。

もう一つのグループは Control Group とする。こちらも Treatment Group と同じように最初に 4 人 1 グループになってもらった。(端数の関係上 3 人 1 グループになったグループもある)そして Control Group には、2046 年の世界にタイムスリップしたと想像してもらい、これからちょうど 30 年後前、すなわち 2016 年 10 月 10 日の新聞を読んでもらった。2046 年に生きる被験者に、それらの新聞記事から

- ・ 「当時（2016 年）の人たちに、もっと真剣に検討してほしかった」と思う事柄を扱った記事

もしくは

- ・ 「当時（2016 年）の人たちが、よくぞ検討してくれた」と思う事柄を扱った記事

を、合わせて最大 3 個選び、理由とともに優先度の高い順に記入してもらった。その後、引き続き、2046 年の世界にタイムスリップしたと想像してもらい、それらの中から

- ・ 「当時（1980 年）の人たちに、もっと真剣に検討してほしかった」と思う事柄を扱った記事

もしくは

- ・ 「当時（1980 年）の人たちが、よくぞ検討してくれた」と思う事柄を扱った記事

をグループとして、合わせて最大 3 つ選び、理由とともに優先度の高い順に記入してもらった。この作業が全て終わった後、Treatment Group と同様のアンケートを行った。

5. 結果

5.1 被験者人数について

高知工科大学の経済・マネジメント学群の学生 103 人に協力してもらった。そのうち、Treatment Group は 54 人であり、Control Group は 49 人であった。

Summaries

Variable	Control (49 subjects)					Treatment (54 subjects)				
	Mean	Median	SD	Min	Max	Mean	Median	SD	Min	Max
Donation Total	430.61	300	405.28	0	1000	603.70	600	382.62	0	1000
Generativity Total	25.14	24	14.88	4	64	23.87	23	14.42	5	67
Critical Thinking	77.78	76	10.48	46	99	76.85	77	10.33	51	105

図 5.2.1

5.2 募金額について

図 5.2.2 は Treatment Group と Control Group の被験者が募金した合計金額を最大 1000 円として計ったデータである。図 5.2.2 より、Control Group の 50% の被験者は 300 円以下を募金しており、半数の被験者がより多くの謝礼金を受ける方が良いと判断したと思われる。Treatment Group は比較的幅広く募金しており、全額募金している被験者も多く見られた。また、図 5.2.1 により Treatment Group の平均的な募金額は約 603 円という結果になったのに対して Control Group の平均的な募金額は約 430 円という結果になった。

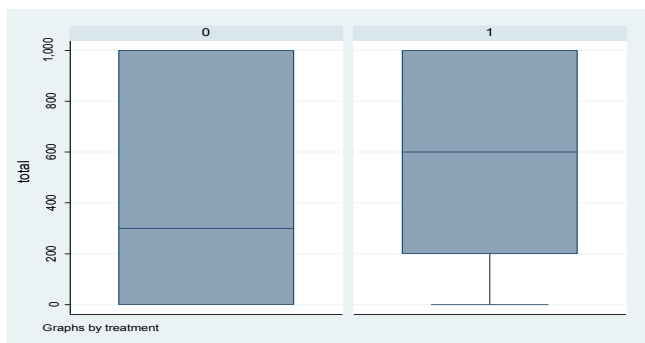
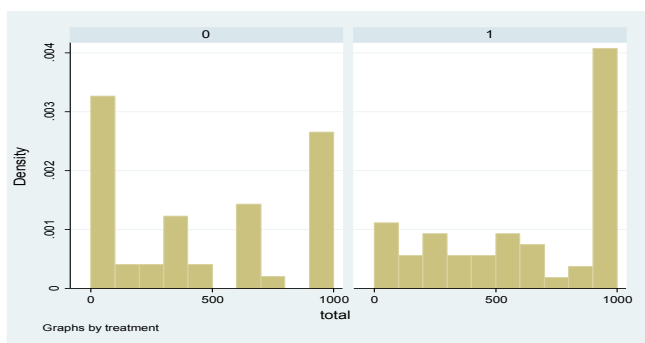


図 5.2.2

5.3 Generativity について

募金額を決定してもらった後、Treatment Group と Control Group の 2 グループの被験者の方々に Generativity に関するアンケートに答えてもらった。ここで、Generativity とは、「次世代の価値を生み出す行為に積極的に関わっていくこと」を示す言葉であり、Erikson (1902~1944) が作った精神分析学上の造語とされる。ここで私の見解だが、Treatment Group の人は Control Group の人に比べて Generativity が高い傾向が見られ、また Generativity の値が高くなればなるほど、募金額も増えると予測していた。また、その反対で Control Group の被験者は Treatment Group の方々と比べると Generativity の値が低くなる傾向がみられると予測していた。しかし、図 5.2.1 からわかるように、両 Group の平均値、中央値、標準偏差には大きな差がないことが分かる。これは、無作為に抽出した被験者が同じような Generativity を有していることを示している。また、以下の図 5.3.1 の Generativity のヒストグラムからも明らかのように、形状が類似していることがわかる。

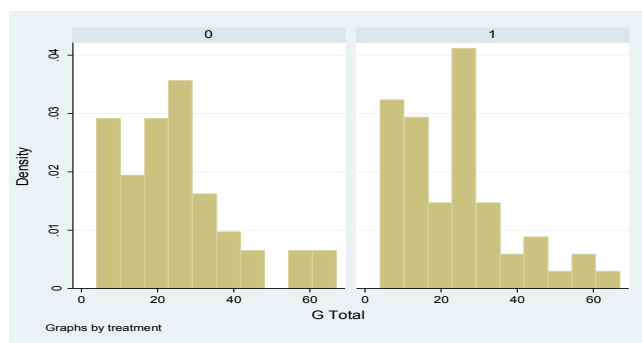


図 5.3.1

5.4 Critical Thinking について

Generativity のアンケート後、Treatment Group と Control Group の 2 グループの被験者の方々に Critical Thinking に関するアンケートに答えて頂いた。Critical Thinking とは物事とを科学的・客観的にあらゆる角度から考え、感情的にまた単なるエピソードに影響を受けることなく、科学的証拠・根拠から限りなく近い答えに近づく方法のことであり、今回は自身の人間性についてのアンケートを行なった。よって、Critical Thinking について当初は Treatment Group の人々の方が Control Group の人々よりも値として大きくなることを予想していた。しかし、図 5.2.1 からわかるように、両 Group の平均値、中央値、標準偏差には大きな差がないことが分かり、両被験者の Critical Thinking は類似していることがわかる。また図 5.4.1 も参考にしてほしい。

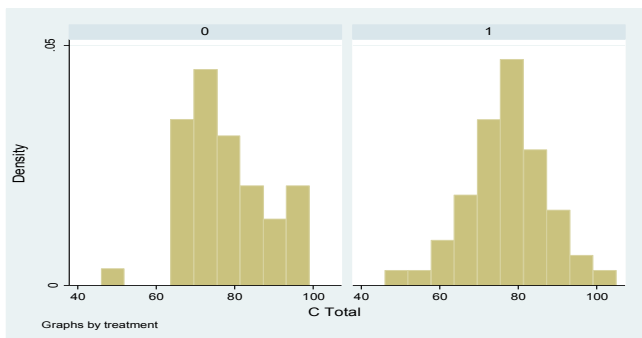


図 5.4.1

5.5 Tobit 回帰分析による結果

まず、5.3 の Generativity の結果より、Treatment Group と Control Group との被験者の差には差がないことが示された。これは無作為に抽出した被験者であるのにもかかわらず、被験者が同じような性質を有することを意味する。

次に私の推測として Treatment Group と Control Group を比較した際、

- Treatment Group は Control group に比べて多くの金額を募金する傾向がみられる
- Generativity の値が高い人は、Generativity の値が低い人に比べてよりお金を募金する傾向が

Tobit Regression

Donation total	Coef.	Std. Err.	t	P>t	95% Conf.	Interval
Treatment	245.69	96.28	2.55	0.01	54.68	436.70
Generativity Total	3.25	3.59	0.90	0.37	-3.87	10.37
Critical Thinking	3.04	5.05	0.60	0.55	-6.98	13.06
_cons	20.52	374.15	0.05	0.96	-721.79	762.82

みられる

以上、二つの傾向が観測されると予測していた。

上の回帰分析を参照してもらいたい。これは「係数 (Coef.) がプラスかつ P 値が 0.05 よりも小さいものが募金額を増加させる要因になりうる」ことを示している。よって結果として、

- Treatment Group は Control Group と比べ、平均して約 245 円多く募金する傾向がみられた
- Generativity の値が高いからといって、募金額が高くなる傾向はない。つまり、Generativity は募金額に影響を及ぼさない

ということが明らかになった。すなわち、歴史の良し悪しを現世代の人の観点から判断するという意識づけは、人々をより未来志向にする可能性があるということが示された。

6. おわりに

本研究から、次世代の価値を生み出す行為に積極的に関わっていく行為をすることは未来への貢献度を増やす要因にはならず、むしろ今を生きる人々の観点から歴史の良し悪しを認識するという

Treatment は持続可能な社会の形成に寄与する可能性があることが明らかになった。しかし、膨大な量の歴史という情報を認識するには、多くの時間を要する。そこで、自分たちの両親や祖父母と一緒に歴史の事柄について議論してみることも一つの Treatment として考えられる。このようなことを行っていくことで人類が持続可能性への一歩を踏み出

せることを願っている。

参考文献

日本の展望委員会 持続可能な世界分科会

「日本の展望-学術からの展望 2010」日本学術会議 2010 年
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-tsoukai-6.pdf>

株式会社 SHIFT Generativity 論・Generativity

<http://shift-inc.co.jp/gtl/generativity/>

フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)」

<https://ja.wikipedia.org/wiki>

